

第一編

北海道抄史

第一章 蝦夷地時代

第一節から第七節までは上巻に登載

第二章 開拓使時代

第一節から第五節までは上巻に登載

第三章 三県一局時代

上巻に登載

第四章 北海道庁時代

第一節から第四節までは上巻に登載

第五章 北海道時代

第一節から第五節までは上巻に登載

第六章 空知の概要

第一節及び第二節は上巻に登載

第二編
自然

第一章 地 誌

第一節 位置・面積

滝川市は北海道の中央西部にある空知地方の中央部に位し、石狩川とその第一の支流である空知川の合流地点から北東に位置する地域である。

東は音江山中腹を東端として西南方向に流れるポンクラ川及び空知川によって赤平市と境し、南は空知川を隔てて砂川市と相對し、西は石狩川をはさんで樺戸郡新十津川町及び雨竜部雨竜町に接し、北は石狩川を境に雨竜郡妹背牛町と須馬麻内(スママナイ)川を以って深

地目別面積(平成二年四月現在)

構成比 %	宅地	畑	田	山林	牧場	原野	雑地	その他	計
七・五	八・六九	一三・八三	一三三・六	九・三九	七・六一	三・八四	九・二六	二四・二八	一一五・八二
				八・一	六・六	三・三	八・〇	二二・〇	一〇〇・〇

川市と接している。

東端 東経 一四二度五分二秒 赤平市界
 西端 東経 一四一度五二分五五秒 樺戸郡新十津川町界
 南端 北緯 四三度三一分三七秒 砂川市界
 北端 北緯 四三度四〇分一秒 雨竜郡妹背牛町界

面積の変更(平成二年四月現在)

平成元年十一月十日付で、滝川市の面積が変更になった。その理由は、国土地理院では従来五万分の一の地図で面積を計測していたのであるが、今回、二万五〇〇〇分の一の地図で精査した結果、今までの公称面積より〇・五二平方キロ少ないことが判明したためであり、その結果は次のとおりとなった。

東西 一六・九キロ
 南北 一五・八キロ
 面積 一一五・八二平方キロ
 (従来は一一六・三四平方キロ)

第二節から第四節までは上巻に登載

第二章 気象

第一節 気象観測

滝川における気象観測は、明治時代から戸長役場・村・町役場に軽便な装置を使って測候され、この観測値を観測所又は北海道庁に報告していた。

昭和二十五年に道立農業試験場原々種農場が滝川市に設置されて気象観測を行うようになったので、昭和二十八年から、この観測値を滝川の気象資料として使っている。

更に、昭和三十四年六月十二日に札幌管区気象台滝川気象通報所が設置されたので、それ以後昭和五十八年三月までは、その観測値を使用している。

その後、昭和五十八年三月末で、滝川気象通報所が廃止となり、同年四月一日からは、アメダスによる岩見沢測候所の観測結果にもとづいて滝川の気象観測値をだすようになった。

アメダス無人観測所の位置は、南滝の川二五一一、北緯四三度三四分一秒、東経一四一度五六分七秒、海面上の高さは四八メートルにあって、この観測値が岩見沢測候所に自動的に送られている。

本節の気象観測の数値は、道立滝川遺伝資源センター（もと原々種農場）が、岩見沢測候所から送られたものを分析作成されたものをもとに整理して、市史上巻に引続いて掲載したものである。

このため、市史上巻にある風（風向・風速）に関する資料が得られないので本節では掲載できなかった。

1 気温

最近、地球の温暖化が唱えられているが、滝川市の気温についてみると大きな変化はみられない。年別最高気温については従来の観測値との差は少ないし、年・月別の平均気温の推移についても、平成元年の年間平均気温が十数年ぶりに七・九度となり高かったが、他の年については従来とほぼ同様である。ただし、年・月別の最低気温については、この一〇年間、マイナス二五度以下が二回だけで、この点では、寒い日が少なくなったと言える。

一年・月別平均気温表（摂氏）

年	月												年間	備考
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月		
昭和五三	(-) 九・〇	(-) 一三・〇	(-) 四・六	三・八	一〇・八	一七・七	二三・〇	二一・七	一五・一	八・一	一・八	(-) 四・〇	六・〇	遺伝資源センターがまとめたもの
五四	(-) 七・九	(-) 五・八	四・一	二・七	一〇・四	一六・六	一九・〇	二〇・一	一四・九	一〇・八	二・二	(-) 二・一	六・四	
五五	(-) 八・〇	(-) 一〇・〇	三・二	二・一	一一・〇	一七・三	一九・三	一八・五	一五・四	八・七	二・六	(-) 四・二	七・〇	
五六	(-) 一〇・〇	(-) 七・二	三・六	四・四	九・五	一五・一	二〇・八	一九・七	一四・六	九・一	〇・七	(-) 三・〇	五・七	
五七	(-) 八・一	(-) 九・六	二・〇	四・二	一一・七	一四・八	一九・九	二二・二	一五・九	一〇・一	〇・七	(-) 三・〇	六・七	
五八	(-) 七・一	(-) 八・五	三・八	七・七	一一・七	一二・九	一七・八	二一・三	一五・九	六・九	二・四	(-) 五・六	六・〇	
五九	(-) 八・九	(-) 一〇・二	五・五	二・九	一一・四	一七・六	二三・一	二一・三	一六・〇	八・一	一・二	(-) 四・九	六・一	
六〇	(-) 一二・一	(-) 五・四	二・六	六・〇	一一・〇	一五・〇	二〇・二	二二・三	一四・六	九・〇	二・三	(-) 六・八	六・三	
六一	(-) 一〇・〇	(-) 九・五	三・七	四・六	一一・二	一六・四	二一・九	二二・九	一六・五	七・三	一・六	(-) 四・七	五・八	
六二	(-) 八・三	(-) 七・四	二・四	三・八	一一・五	一七・〇	二〇・〇	一九・七	一六・四	九・五	一・六	(-) 四・七	六・五	
六三	(-) 五・九	(-) 九・〇	二・五	四・八	一一・七	一七・七	二一・七	二二・九	一六・四	八・九	〇・一	(-) 二・七	六・六	
平成元	(-) 五・八	(-) 五・三	〇・五	六・七	一〇・七	一五・〇	二一・二	二二・一	一七・一	一〇・二	四・八	(-) 三・七	七・九	

（昭和五十三年以降の毎日の平均気温は、一日の最高気温と最低気温の計を二で除したもので、月、年平均気温は、その平均値である）
 二 年別最高・最低気温（摂氏）
 △道立植物遺伝資源センター資料▽

年	最高極		最低極		年	最高極		最低極	
	最高	極	最低	極		最高	極	最低	極
昭和五三	三四・八	三〇・九	(-) 二七・〇	(-) 二〇・八	昭和五九	三二・〇	三二・五	(-) 二六・二	(-) 二二・九
五四	三〇・九	二九・八	(-) 二二・三	(-) 二〇・八	六〇	三一・九	三一・九	(-) 二四・九	(-) 二〇・六
五五	三〇・九	二九・八	(-) 二二・三	(-) 二〇・八	六一	三一・九	三一・九	(-) 二四・九	(-) 二〇・六
五六	三〇・九	二九・八	(-) 二二・三	(-) 二〇・八	六二	三一・九	三一・九	(-) 二四・九	(-) 二〇・六
五七	三〇・七	二九・八	(-) 二二・三	(-) 二〇・八	六三	三一・九	三一・九	(-) 二四・九	(-) 二〇・六
五八	三一・四	三〇・七	(-) 二〇・八	(-) 二〇・八	平成元	三四・九	三四・九	(-) 一八・四	(-) 一八・四

※明治三十三年の観測以来 最高極値 三八・五（明治三五）
最低極値（）三二・五（明治四二）

三年・月別最高気温（摂氏）

年	月	最高気温												
		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	年間
昭和	五三	一・七（）	〇・二	八・六	一八・二	二三・一	二九・一	三一・一	三四・八	二四・六	二四・八	二四・三	九・二	三四・八
五	四	四・二	四・五	四・二	一一・九	二四・九	二六・七	二九・九	三〇・九	二四・六	二〇・六	一六・三	八・〇	三〇・九
五	五	三・三	〇・八	八・九	一三・八	二五・九	二九・五	二七・一	二九・八	二五・五	二二・〇	一二・三	七・三	二九・八
五	六	〇・三（）	〇・二	六・四	一九・一	二四・二	二五・六	三二・〇	三三・一	二三・六	二〇・九	一一・七	四・七	三三・一
五	七	三・五	二・〇	六・四	一六・七	二四・五	二六・六	三〇・七	二九・八	二七・二	二〇・八	一三・五	四・六	三〇・七
五	八	三・八（）	〇・三	八・二	一九・四	二三・八	二一・五	二六・一	三一・四	二七・五	一八・〇	一五・〇	三・四	三一・四
五	九	〇・六（）	一・六	一・四	二〇・四	二六・七	二七・五	三一・五	三二・〇	二五・九	一九・八	一四・八	五・五	三二・〇
六	〇	〇・〇	三・六	四・八	一八・一	二九・三	二七・二	三二・五	三一・八	二五・八	二二・二	一四・一	五・五	三二・五
六	一	三・九	一・三	三・五	一六・五	二五・〇	二七・四	三〇・七	三一・九	二九・一	二一・〇	一五・二	三・五	三一・九
六	二	五・六	二・八	五・八	二一・九	二五・三	三〇・三	二八・六	二九・七	二八・二	二四・〇	一二・三	五・八	三〇・三
六	三	四・三	二・六	五・六	二三・六	二三・二	二七・八	二七・六	三二・〇	二五・五	二〇・三	一二・四	〇・四	三二・〇
六	四	三・七	四・六	二・五	二一・九	二三・九	二七・八	三一・七	三四・九	二六・二	二〇・二	一六・四	一三・二	三四・九
平成	元	三・七	四・七	一・二	二一・九	二三・九	二七・八	三一・七	三四・九	二六・二	二〇・二	一六・四	一三・二	三四・九

四年・月別最低気温（摂氏）

年	月	最低気温												
		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	年間
昭和	五三	（）二二・六	（）二七・〇	（）一九・五	（）一〇・六	一・六	三・九	一三・七	一〇・二	五・二	二・四	七・四	（）二一・二	（）二七・〇
五	四	（）二三・六	（）一九・二	（）二六・五	（）八・九	〇・三	三・七	八・四	九・二	三・四	〇・二	六・五	（）一九・四	（）二三・六
五	五	（）二〇・七	（）二一・三	（）二五・五	（）六・二	〇・六	五・五	一一・七	八・三	二・八	二・五	五・〇	（）一九・九	（）二一・三
五	六	（）二四・八	（）二三・四	（）二八・三	（）四・七	〇・五	三・二	一二・三	一一・五	四・一	二・〇	八・〇	（）一五・七	（）二四・八
五	七	（）二三・九	（）二五・六	（）二四・四	（）七・一	二・〇	三・六	一一・九	一三・八	六・二	〇・〇	九・二	（）一二・四	（）二五・六

第二編 自然

平成 元	六三 九七
六五	八五
二一	四一
五一	四七
五七	三九
五三	七三
四七	三三
二九	二九〇
二〇六	八〇
二〇〇	一三三
一三六	一三四
一七一	一三五
一二三	一、一八六
一、一五九	

年・月別降水日数（注・冬季間の雪も雨量に取扱われる。単位はミリ）
（冬季間の降雪日も含む）

一二年間の平均	年											年間降水 日数	
	平 成 元	六 三	六 二	六 一	六 〇	五 九	五 八	五 七	五 六	五 五	五 四		昭 和 五 三
二二	一五	二八	二五	二二	一九	一七	二二	二五	一五	二三	二三	二四	一月
一八	一一	二三	一九	一八	一四	二〇	一八	一六	二一	二〇	一七	一九	二月
一六	一四	一六	一七	一四	二〇	一三	一一	一七	二〇	二三	一八	一二	三月
一二	一〇	一六	一九	一五	一〇	四	九	一一	一四	一五	六	一三	四月
一一	一二	九	八	一七	〇	七	一一	一一	一三	一一	一一	一一	五月
九	一二	二	七	三	五	二	一五	六	九	一一	九	一〇	六月
九	八	六	一六	九	一	八	一三	七	七	九	八	七	七月
一〇	一〇	二	一五	八	七	五	七	〇	一七	一一	五	一〇	八月
一一	一五	七	〇	一五	一一	一一	〇	九	二	一一	一一	一〇	九月
一七	二〇	一九	一三	一五	一七	一九	一九	一一	一八	一七	一六	一七	一〇月
二〇	一九	一九	二〇	二八	二四	二二	二三	二二	二八	二三	一八	一八	十一月
二二	二〇	二三	二三	二二	二八	二三	一四	二五	一八	二一	一七	一八	十二月
一七六	一六六	一九〇	一九一	一八五	一七六	一六〇	一六二	一六九	一九二	一八五	一五九	一六九	

3 霜・雪（終始等）

年	根雪終日	根雪期（積雪）日間	降雪終日	晩霜日	無霜期日間	初霜日	降雪始日	根雪始日	備考
昭和五三	四・一四	一三五	四・二二	五・一三	一四七	一〇・八	一〇・一三	一一・三	
五四	四・一四	一三三	四・一八	五・一四	一七八	一一・九	一〇・三一	一二・一〇	
五五	四・二〇	一三三	五・六	四・一九	一九一	一〇・二八	一〇・二二	一一・四	
五六	四・一六	一三四	四・二五	五・一七	一五三	一〇・一八	一〇・二三	一一・六	
五七	四・一五	一六一	四・二〇	四・二二	一六六	一〇・六	一〇・二六	一一・二四	
五八	四・一七	一三五	四・四	五・一〇	一五〇	一〇・八	一〇・一七	一一・二五	
五九	四・二一	一四九	四・一八	五・一一	一四九	一〇・八	一〇・二五	一一・一一	
六〇	四・九	一五〇	四・一〇	五・一七	一四一	一〇・六	一一・二	一一・一四	
六一	四・二二	一六〇	四・一六	五・一一	一四五	一〇・四	一〇・一七	一一・一四	
六二	四・二一	一五九	五・五	五・一五	一五〇	一〇・二三	一〇・二一	一一・一九	
六三	四・一八	一五二	四・二五	五・九	一六〇	一〇・二七	一一・二	一一・一〇	
平成元	三・三一	一四二	四・二六	四・二九	一八五	一〇・三一	一〇・一八	一一・三〇	

△道立植物遺伝資源センター資料▽

降雪量・最深積雪量など

雪は雨量として取り扱われており、市史上巻では最深雪量の記録のみ掲載しているが降雪量の記録はない。雪は、北国の日常生活と関係が深く半年間も雪に接するので、本編では遺伝資源センターから資料を入手し、昭和五十三年以降の降雪量もあわせて掲載した。

月・年別降雪量・最深積雪量と最深積雪日(単位・ミリ)

年	月別降雪量												年間降雪量	最深積雪量	その当月・日				
	一	二	三	四	一	一	一	二	三	四	五	六							
昭和五三	一、四八五	二、〇二六	二、二二〇	三一四	六〇	六二八	六、九四八	一、〇〇〇	三・一五	昭和五三	一、四八五	二、〇二六	二、二二〇	三一四	六〇	六二八	六、九四八	一、〇〇〇	三・一五
五四	一、四九四	二、一五〇	二、一七七	四三九	二七九	三〇二	六、二二〇	九五〇	二・一三	五四	一、四九四	二、一五〇	二、一七七	四三九	二七九	三〇二	六、二二〇	九五〇	二・一三
五五	九七〇	一、八四一	二、二八五	五三三	五二	九三〇	八、五三五	九〇〇	三・一二	五五	九七〇	一、八四一	二、二八五	五三三	五二	九三〇	八、五三五	九〇〇	三・一二
五六	一、四三六	二、六四〇	三、〇一三	四七四	三五六	一、〇七二	八、四五九	一、二六〇	三・一二	五六	一、四三六	二、六四〇	三、〇一三	四七四	三五六	一、〇七二	八、四五九	一、二六〇	三・一二
五七	二、〇五七	二、三六一	二、一九二	四二一	二三七	九八〇	八、四二六	九五〇	二・二四	五七	二、〇五七	二、三六一	二、一九二	四二一	二三七	九八〇	八、四二六	九五〇	二・二四
五八	二、三〇五	二、四六八	二、三七三	六三	一〇三	一、〇六〇	八、八九三	一、〇一〇	二・一四	五八	二、三〇五	二、四六八	二、三七三	六三	一〇三	一、〇六〇	八、八九三	一、〇一〇	二・一四
五九	一、九九一	二、五九三	二、四八一	六六五	五二	三七六	四、九九八	一、一五〇	二・二二	五九	一、九九一	二、五九三	二、四八一	六六五	五二	三七六	四、九九八	一、一五〇	二・二二
六〇	一、二三五	一、六三七	一、六五三	四五	二六三	二、〇八六	一、二二五	七九〇	三・一一	六〇	一、二三五	一、六三七	一、六五三	四五	二六三	二、〇八六	一、二二五	七九〇	三・一一
六一	二、七三五	三、〇五六	三、一九三	八九二	二八九	一、二一二	九、〇四〇	一、一七〇	二・二五	六一	二、七三五	三、〇五六	三、一九三	八九二	二八九	一、二一二	九、〇四〇	一、一七〇	二・二五
六二	二、一六六	二、二四二	二、五五七	五七四	一一八	一、一七三	一〇、五二四	一、〇六〇	三・六	六二	二、一六六	二、二四二	二、五五七	五七四	一一八	一、一七三	一〇、五二四	一、〇六〇	三・六
六三	二、一九六	三、二六三	三、二〇一	五七三	三六三	一、一五七	六、五三〇	一、三三〇	二・二九	六三	二、一九六	三、二六三	三、二〇一	五七三	三六三	一、一五七	六、五三〇	一、三三〇	二・二九
平成元	一、九一四	二、〇五一	一、〇四五	一	八〇一	未	未	九九〇	一・二九	平成元	一、九一四	二、〇五一	一、〇四五	一	八〇一	未	未	九九〇	一・二九

4 天 候

天候は年間を通じ晴よりも曇の日が多い。日照時間については、昭和六十二年以降減少の傾向にある。

年・月別日照時数(単位・時間)

年	月												年間	一四 月間
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二		
昭和五三	一〇四・七	一七〇・八	二七〇・六	一五五・三	二〇一・二	一八二・七	二〇〇・七	二二二・八	二七六・六	一五〇・八	一九三・三	二〇四・四	二〇四・四	一、三三九・九
五四	壹・六	二九〇	一四四・四	一七四・四	三三・九	一八七・三	二五・五	二四二・二	一九四・八	一四一・一	七六・六	七三・三	一九三・〇	一、三三一・一
五五	一〇五・七	一四七・九	二〇〇・二	一六六・六	一七二・一	二〇五・八	一九三・三	一七九・九	一九二・一	一四七・七	九六・六	八三・六	一、八三三・五	一、二四五・五
五六	二五・九	一一〇	一八四・四	一九九・九	一八四・七	一七九	一四二・〇	一三三・二	七四・九	一四一・一	七九・九	四六・六	一、六三三・五	一、一四一・七
五七	六六・〇	三三・三	一三三・七	一九二・二	一五九・九	二〇六・一	一九七・七	一四四・三	一八五・四	二七・八	九〇・三	七二・一	一、七三三・六	一、三六六・四
五八	一四八・八	一九〇	二五五・七	二五・九	三三・〇	一五三・二	一九五・五	二〇九・四	一九〇・〇	一五三・三	一〇八・八	一〇三・三	二、二四四・八	一、三六六・三
五九	一六〇・九	一八六・九	二六七八	二七二・一	二五・五	二三四・三	三六〇	二四二・三	三三・七	一四四・四	一七四・四	一〇七・四	二、四六二・一	一、六八二・二
六〇	一三三・二	一九九	二四・三	二〇三・三	二七四・〇	二五三・五	二二・四	二二九・九	二〇・五	一九四・四	一〇六・一	二七・八	二、三四・五	一、五五〇・〇
六一	二七・一	二〇三・四	三三・七	二四・四	一九三・三	二七九・三	二二・四	一八五・六	二九・九	一八三・四	八八・七	二五・九	二、二〇〇・四	一、四九六・六
六二	一三三・三	一七四	二二〇・六	二〇九・四	二四・四	二二〇	一〇二・二	三三・八	二九・七	一四三・七	七・六	五・七	一、七〇・一	一、二二五・五
六三	四三・七	二六三	一五九	二五九	一六・五	二九九	一七八・四	二四・四	二四・四	一八・九	九・九	二・三	一、四六四・二	一、〇八三・三
平成元	八二・六	一〇七・九	二二・六	一四二・六	一五・一	一七八	一九二・七	一八六・六	九七・七	二七・七	五・二	五・一	一、五〇八・五	一、〇八三・三

△道立植物遺伝資源センター資料▽

5 地温・水温

気象条件は農作物栽培に大きな影響をもたらすが、地温や水温もまた成長に大切な条件である。畑作・水稲関係の地温・水温は次のとおりである。

平成 元	六三 一九・四 一七・九	二二〇・二 二〇・九 二二・一	一九〇・〇 二一・八 二一・三	平成 元	六三 一五・〇 一四・〇	六二二・四 九一八・九 一九・三	一七・四 二一・三 二一・八
---------	--------------------	-----------------------	-----------------------	---------	--------------------	------------------------	----------------------

注 水田水温、かんがい水温の八月の△印は上旬のみの観測

△道立植物遺伝資源センター資料▽

第二節は上巻に登載

第三章 生 物

第一節から第三節までは上巻に登載

第三編
開
拓

第一章 先住民族

第一節から第五節までは上巻に登載

第二章 開村以前

第一節から第七節までは上巻に登載

第四編

屯田兵制

第一章 屯田兵の起源

第一節及び第二節は上巻に登載

第二章 屯田兵制度

第一節から第六節までは上巻に登載

第三章 滝川屯田

第一節から第六節までは上巻に登載

第四章 江部乙屯田

第一節から第四節までは上巻に登載

補説について

滝川の開発は、明治十九年五月から着手された市来知(現三笠市)と忠別太(現旭川市)に通ずる上川道路開きく工事の拠点になった時に始まる。当時、この近辺一帯は空知太と呼ばれており、同年五月に空知川右岸(空知大橋北端ニトリ家具店敷地内)に工事事務所が建てられ、この道路工事の測量に道庁属の高畑利宜が担当し、また左岸には同年六月に三浦米蔵が経営した渡船場ができた時から、一般人が定住することとなったのである。

しかし、実際に開拓が始まったのは滝川村として開村された明治二十三年(一八九〇)に屯田兵とその家族が移住してからである。

今を去る一〇〇年前の明治二十三年六月三十日から七月七日にか

けて、滝川屯田兵が四四〇戸(家族を含めて一、九三一人)が入植し、それから四年後の明治二十七年五月五日から十七日まで江部乙屯田兵が四〇〇戸(家族を含めて一、七八八人)が移住し、家族ともども、言語を絶する苦難に耐えて未開の原始林を切り開き、今日の滝川の発展の基礎を築いたのである。

この屯田兵のことについて、前滝川市史(昭和三十七年刊行)では一九ページ、現滝川市史上巻(昭和五十六年刊行)では一四一ページにわたり、屯田兵の起源、屯田兵制度、滝川・江部乙両屯田、活動状況、その治績などを詳細に記述している。

これは、屯田歩兵第二大隊日誌や高畑利宜遺稿をはじめ各種書簡や記録の保存が良かったので、移住当時の状況が的確に把握できたのであろう。

したがって、本編では現滝川市史発刊以降に入手した資料にもとづく、屯田開拓の進捗状況と、屯田兵後継者や子孫の現況について若干の補説をすゝるとども、他は省略した。

補説一 屯田兵村別開墾成績 明治三十三年現在

屯田名	入植地名	給与地	開墾反別	給与地に対する開墾の年数	土地没収件数
山鼻札幌郡	山鼻村	一、二九〇・〇町	六七四・三五二	二四	一
山鼻村	山鼻村	一、二六三・三	七二〇・七五七	二五	七
同	同	一、〇九五・〇	五六一・八五一	一三	六

篠路	同	一、〇八・三	六三四・八五七	一一	四
野幌	江別村	一、一一三・三	五九九・一五四	一五	四
江別	同	七七八・三	四五八・七五九	二二	四
美唄	沼貝村	六一三・三	四〇一・九六六	九	二
高志内	同	四六三・三	二五七・三五六	九	一
茶志内	同	四六一・七	三五五・〇七七	九	二
南滝川	滝川村	一、一二五・〇	六七三・九五九	一一	二
北滝川	同	一、一〇三・三	七三〇・一六六	一〇	六
南江部乙	同	二、〇三八・三	一、四一九・三七〇	六	一
北江部乙	同				
西秩父別	秩父別村				
東秩父別	同				
南一巳	一巳村	五、〇九六・七	三、四六一・五六八	五	一
北一巳	同				
納内	同				
西永山上川郡	永山村	一、〇二四・三	九六二・三九四	九	一
東永山	同	一、〇二一・〇	八八・九八〇	九	一
東当麻	当麻村	二、〇八二・〇	一、二八五・七六二	七	一
西当麻	同				
上東旭川	東旭川村	一、〇二六・七	六九一・九六七	八	一
下東旭川	同	一、〇〇四・五	五八九・四五九	八	一
士別	士別村	五〇〇・〇	一三七・〇二七	一	一
南剣湧	剣湧村	一、六九八・三	五一〇・六三〇	一	一
北剣湧	同	一、〇一三・三	四三四・四四三	一三	二〇
輪西室蘭郡	輪西村				

東和田根室郡和田村 (現根室市)	一、〇二五・〇	三七八・九三七	一四	六四
西和田 (現根室市)	一、〇一一・七	三四七・四三四	一二	六四
北太田厚岸郡太田村 (現厚岸町)	一、〇六〇・〇	二九七・九二八	一〇	二九
南太田	一、一二一・七	三三五・七二九	一〇	二九
上野付牛常呂郡野付牛村 (現北見市)	三、〇三五・〇	一、五〇二・五四九	三	一
中野付牛	同			
下野付牛	同			
南湧別紋別郡湧別村	二、〇二八・三	一、一四〇・八五六	三	一
北湧別	同			
計	三七屯田、一七村	三六、一九一・六二〇、三八一・八五六七・七	三	一六三

本資料は、上原嶺三郎著「北海道屯田兵制度」北海学園出版会刊行から引用(二部補正)したものである。

補説二 滝川屯田と江部乙屯田の開墾達成度

補説一の「屯田兵村開墾成績表」のとおり、滝川屯田(南滝川と北滝川を合わせる)は、江部乙屯田(南江部乙と北江部乙を合わせる)より四年前に入植、開墾を始めたにかかわらず、明治三十三年現在の開墾面積は一、四〇〇町歩であり江部乙屯田の一、四一九・三町歩に及ばず、給与地に対する開墾比も六三・七パーセントで、江部乙の七〇パーセントよりも下回っている。

この原因としていろいろ挙げられるが主なものは次の二点である。

1 屯田兵の構成

明治二十三年に移住した滝川屯田兵は、北辺警備と旧士族の授産

を目的とした最後の制度であり、翌年からは北辺警備と開拓ということに変わった。したがって滝川屯田は旧士族で構成され農業経験者が少ないのにくらべ、江部乙屯田は農業経験者が大半を占め、農業技術に格差があり、この結果が開墾成績に影響したのである。

2 移住の時期と大隊本部の指導

滝川屯田兵は六月三十日から七月七日までに入村した。大隊本部では、開墾よりも屯田兵屋周囲の整理や道路づくりを中心に重点を置いたために約一か月ほどこの仕事にかかりきりで、引き続き八月四日から屯田兵としての訓練を始めた。このために実際の開墾作業が遅れてしまい、入植の年には蕎麦も大根も作ることもできず、ほとんど無収穫に近い状況であった(滝川小史「わがふるさと」、市史上巻より)。

江部屯田は明治二十七年五月五、十二日、十七日の三回にわけて入植した。屯田本部では、先の滝川屯田移住のにがい経験をつまえて、兵屋以外の整備を最小限度に済ませて開墾農耕に集中するよう適切な指導をした。このため入植初年度には、蕎麦のばら播きをして秋には相当の収穫があったという(江部乙町史および市史上巻、屯田兵の談話より)。こうした開拓初年度の成否も、両屯田兵及び家族の開拓意欲に大きく影響し、開墾成績に差がついた一因とも言えよう。

補説三 開墾成績の悪い他兵村について

明治二十三年、滝川屯田と同時に厚岸郡太田村(現厚岸町)に移住した屯田兵の開墾率は二九パーセントと異常に低い、これは霧のため日照時間が少なく農耕に不適であり、生活も非常に苦しかったようである。その他にも気象条件とか海流の関係などで開墾が進ま

ず、土地没収されたところも多い。これらは、屯田兵村指定に際しての調査が不十分であったことも考えられ、開墾成績が単に屯田兵の作業効率によるものでないことが理解できる。

補説四 屯田兵の後継者や子孫の現況

滝川・江部乙両屯田兵村ともに移住前後の状況や、当時の苦勞のようすなどは記録として残されているが、その後の推移についてはまとまった記録がない。更に、屯田兵の後継者や子孫のこととなるといっそう記録が希薄で、昭和三十年代になってようやく後継者を中心として、先人の偉業を讃え、その苦勞を偲び、これらを後世に伝えようと組織的な運動が開始されたのである。

平成二年七月現在、両屯田兵後継者団体(滝川屯田兵遺徳顕彰会、江部乙屯田親交会)の調査によると、滝川屯田の場合市内に居住する後継者の家庭は七七戸(そのうち、農業後継者一六戸を含めて給与地に居住している家庭二五戸)であり、滝川市以外で所在が判明している家庭は一〇五戸である。

一方、江部乙屯田の場合は旧江部乙町に居住する家庭のみに調査をしぼり、後継者の家庭は九五戸(そのうち給与地に居住している家庭は三六戸)となっている。

なお、滝川屯田の場合、昭和十三年七月に北海道人造石油株式会社滝川工場誘致に際してこの敷地一一七町歩(坪当り九〇銭)、同年八月、人石工場の位置決定と同時に夕張製鋼製作所滝川第三工場の敷地として四〇町歩、合計一五七町歩の土地が買収されたが、この大半は屯田兵後継者の所有する農地であった。

当時の戦時体制から、両工場とも国策工場ということで協力を要請され、やむなく給与地を売却して町内外に転居した後継者も少なからずいたことを記録に留めておきたい。

滝川屯田兵遺徳顕彰会 滝川屯田後継者の酒井信高を中心に同志の者が呼びかけて昭和三十三年三月十日に「滝川屯田兵移住者遺徳会」が発足した。設立時の会員は一一四名であった。

この会設立の趣旨は、「遠く故郷をはなれ、想像を絶する苦難を克服して原始林を拓き、今日の滝川の発展の基盤を築いた屯田兵」の偉業を讃え、子々孫々にまで開拓者魂を伝えていくことと、その子孫として郷土滝川の発展に寄与していく自覚を強めていくということである。

会の事務所を滝川神社事務所内に置き、会員は滝川屯田兵に關係のある家族を正会員とし、会の趣旨に賛同する者を賛助会員とした。

主な事業としては、滝川屯田移住日を記念日と定め毎年記念式を行う。屯田兵関係人物故者の慰霊祭典の執行と顕彰。現存者の慰安。屯田兵の治績の調査と、後世子孫に伝えるための集録。会員の福利厚生と相互の親睦を図るなどである。

このうち、記念式典については、昭和三十三年七月一日に市制が施行されたのに伴い、開基記念日が七月一日と決定されたので、本会の移住記念式もこれにあわせて毎年七月一日に滝川神社境内で行うようになった。その後、昭和五十二年十二月に会の名称を「滝川屯田兵遺徳顕彰会」と改めた。今までの大きな事業としては、昭和

五十四年の春に、滝川斎苑の前庭に、市の花「ツツジ」を移植して「ツツジ」を造成している。

また、平成二年七月一日、滝川市開基一〇〇年記念式当日、市内はじめ、道外からも滝川屯田兵後継者八〇名が参加して、滝川屯田移住一〇〇年記念「子孫の集い」を盛大に開催した。なお、この行事とあわせて「屯田移住百年記念誌」を発刊している。

歴代会長

- 初代 酒井 信高 昭和三三・三〇
- 二代 白水 務 昭和五二・一二
- 三代 猪口英之助 昭和五五（現在）

屯田兵の子孫 滝川屯田兵遺徳顕彰会では、以前から屯田兵子孫（後継者）の調査を実施していたが、平成二年七月一日発刊の「屯田兵移住百年記念誌」に、今まで判明した分の名簿を掲載している。

この調査は猪口会長を中心に長期間にわたって調査したもので、今後、各地の屯田兵子孫との比較研究上貴重な資料となるであろう。

本節では、江部乙屯田兵子孫と同じように市内に在住する子孫の家庭のみ掲載した。ただ、本表では後継者以外で遺徳顕彰会に入会している市内在住の二家庭も含めたので、記念誌の名簿とは若干異なっている。なお、ここで後継者とは屯田兵の位牌をもつ家庭を指す。

1 給与地に現在居住している家庭（内は屯田兵名）

- 平木 勝（歴次） 桑原 正美（益夫）
- 原田 直久（亥津童） 植田 昭好（石馬）
- 佐藤 政敏（佐々木高章） 野村 貞輔（数太）

御園生	重(前田芳治郎)	見沢照雄(長右エ門)
御園生	重(三津三)	原田重雄(常善)
平林	平(亀丸)	白水務(広)
倉増	正生(英輔)	増田勝(政吉)
有馬	隆士(辰右エ門)	棚井清一(清太郎)
榊田	マサ(喜次郎)	尾崎勉(嘉一郎)
小坂	庄治(庄吉)	中村猪二(由太郎)
猪口	英之助(英信)	辻奥敏昭(赤川安太郎)
野田	アサ(丈二郎)	内野竜雄(栄三郎)
稲葉	ミツエ(徳次郎)	
2	給与地を離れて市内に居住している家庭	計二五戸
小川	昭夫(喜代次)	松本憲次(善助)
中村	信夫(今蔵)	久保キヨ(菊太郎)
尾崎	清(芳次郎)	河内清子(重吉)
南	博雅(弁治)	岩永慶子(長井愛之助)
田村	勇(千代蔵)	佐原ソユ(初之進)
河内山	シズエ(庄平)	田垣雅幸(勘次郎)
峯廻	勝行(春蔵)	増沢美津子(後藤広吉)
西川	正哉(辰之助)	稲垣照夫(兼吉)
深沢	徹郎(英作)	古瀬節子(熊次郎)
二葉	孝夫(栄三郎)	浦部憲正(弥三郎)
兼子	ウメ(喜市)	石丸丑之助(辰吉)
宮村	恒子(常吉)	菅原武男(庄次郎)
田中	ユキ(戸田宝次)	酒井利通(利太郎)
森村	米英(作松)	森本徳助(幸末)
中	文雄(源次郎)	南里金重(又太郎)
藤山	幾雄(力熊)	木津好夫(上杉由真)
土田	秀雄(金三郎)	増田岩夫(正義)
南	文夫(房吉)	井手清(助蔵)
粟屋	喜博(熊槌)	鈴木ミネ(良吉)

第四編 屯田兵制

高橋昭男(音蔵) 松田一男(十時 薫)
 河内文男(菊之丞) 中村昭二(愛之助)
 山田英雄(喜八) 森脇勇雄(長三郎)
 原田純一(保太郎) 中村ムラ(寅吉)
 園田繁雄(与吉) 岡本スエ(貴定)
 鈴木和気行(好己) 高橋良徳(村上 好春)
 新庄宏治(宇喜槌) 近野 銭太郎(惣五郎)
 注(深沢徹郎と、菅原武男は会員として名簿に入れた)
 計二五戸

このほか、滝川市以外に居住している後継者一〇五戸の現住所が記念誌に集録されており、滝川屯田兵遺徳顕彰会では、今後この資料をもとに、更に調査を続ける予定である。

江部乙屯田親交会 昭和三十六年五月八日、江部乙町内に居住する屯田二世四三名が集まり「江部乙屯田親交会」を設立した。

会の目的としては、屯田の偉業を末永く讃え、開拓者魂を高揚していくというものであり、事業としては屯田兵の遺跡、遺品の保存をはじめ、屯田兵物故者の慰霊、現存者の慰安、会員相互の親睦をはかることである。会員は、江部乙町在住の屯田兵の後継者とし、会に賛同する者を準会員としている。

以後、毎年総会を開き親睦を深めるとともに、事業としては屯田兵遺品を集め郷土館に陳列、昭和四十年には、練兵場跡、射撃場跡、屯田本部跡に、それぞれ札幌軟石で石標を建立している。また、毎年、屯田公園を清掃したり、記念のニレの木の保全につとめている。

また、昭和五十八年九月には、屯田移住九十年を記念して、江部

乙神社境内に「風雪九十年屯田魂」の碑を有志寄付金で建ててい
る。

歴代会長

- 初代 吉田 精一 昭和三六〇 六代 吉田 堅治 昭和五六・八月まで
- 二代 進藤 正雄 同 三九〇 代行 田野 茂 同 五六・九月から
- 三代 一木 善二 同 四五〇 七代 黒田 実 同 五七〇
- 四代 北山 季武 同 五〇〇 八代 吉沢 省二 同 五八〇現在
- 五代 藤田 利雄 同 五一〇

江部乙屯田兵の子孫 屯田親交会事務局では、昭和六十三年に入

植時の給与地に現在居住している後継者家庭と、給与地を離れて旧
江部乙町内に居住している後継者を調査しているが、その実態は次
のとおりである。なお、今後、屯田移住百年を記念して、更に町外
住移者も含めて詳細に調査するよう準備をすすめている。

1 給与地に現在居住している家庭 ()内は屯田兵名

- 木下 スミ (藤助) 山本 一雄 (政吉)
- 松原 敏彦 (和蔵) 木下 靖夫 (由松)
- 堀 一之 (森之助) 三笠 岩蔵 (惣八)
- 石川 伸貴 (近次) 三沢 了三 (貫之助)
- 吉沢 キク (甚三郎) 今井 太一 (由太郎)
- 船津 隆史 (源太郎) 羽野 輝夫 (棟太郎)
- 山越 正夫 (源三郎) 進藤 玉枝 (島吉)
- 山腋 康弘 (与四吉) 前田 春市 (亀吉)
- 森田 真輔 (丑太郎) 岩橋 賢 (浅次)
- 竹内 兼夫 (兼松) 多田 寛司 (力蔵)
- 岩崎 菊治 (初吉) 浮穴 孝良 (鶴蔵)
- 三好 定一 (直作) 山根 孝久 (喜助)
- 石川 忠雄 (栄太郎) 佐々木 芳一 (徳松)
- 島津 実 (勇次郎) 土田 ヤエ (川村 儀蔵)
- 大崎 信吉 (恒吉) 榎本 伊和治 (友吉)

- 本吉 武雄 (与平) 原田 浩 (馬吉)
- 早弓 浩司 (菊一郎) 三浦 利枝 (北山 伝八)
- 井上 英明 (新太郎) (計三五戸)

2 給与地を離れて町内に居住している家庭

- 山崎 国夫 (作太郎) 中西 条吉 (長蔵)
- 高谷 正昭 (千代太) 寺本 八重 (米吉)
- 長井 利州 (慶重) 渋谷 伸一 (良二)
- 家納 利雄 (亀蔵) 本元 重人 (竹次郎)
- 岡本 きく (岩蔵) 田中 俊一 (栄松)
- 越智 弘光 (喜平太) 浅田 義則 (栄蔵)
- 山本 唯好 (利平次) 田中 洋 (金太郎)
- 千徳 範子 (与三松) 長田 敏明 (権次郎)
- 岩佐 賢一 (駒蔵) 木下 善雄 (鉄五郎)
- 玉置 重司 (藤吉) 田野 茂 (円次郎)
- 千田 義男 (仁太郎) 森本 茂雄 (市太郎)
- 河上 マツエ (金次郎) 虎谷 キミコ (竹次郎)
- 埴淵 義信 (平八) 石本 義雄 (市蔵)
- 伊藤 保 (与作) 稗田 イト (五市)
- 安藤 太一 (亀蔵) 田原 実 (茂)
- 平沢 松夫 (末松) 中島 信義 (伊吉)
- 城畑 チヨ (京太郎) 篠原 茂夫 (富次郎)
- 黒田 実 (策一) 野並 恒蔵 (長太郎)
- 中川 原政一 (伍平) 東藤 健治 (庄次郎)
- 中山 隆雄 (仙太郎) 本莊 智一 (幹一)
- 一木 七郎 (百太郎) 石橋 治 (伊勢吉)
- 松本 功 (秀七) 吉本 国一 (茂五郎)
- 本所 利和 (久太郎) 白杵 茂実 (喜一郎)
- 藤田 スミ子 (利一) 福永 昇 (伝兵衛)
- 北森 茂代 (元三郎) 池下 滝 肇 (千松)
- 次原 モト (麻一) 木村 滝雄 (常吉)
- 津留崎 哲彦 (平太郎) 藤沢 進一 (静雄)

寺崎 竹雄（竹次郎） 小橋 澄雄（徳之助）
梅野 伸之（種吉） 寺崎 武雄（和三郎）
小井出 福太郎（熊蔵）
（計五九戸）

第五章 兵村の制度と活動

第一節から第八節までは上巻に登載

